

筑波大学附属小学校教諭 青山由紀先生の授業実践を通して、国語の授業でファンタジーを読むときのポイントについて考えてみます。



あおやま ゆき
青山由紀

東京都生まれ。筑波大学大学院修士課程修了。聖心女子学院初等科教諭を経て、現職。日本国語教育学会常任理事。「ことばと学びをひらく会」役員。著書に「古典が好きになる」(光村図書、近日発売)など。

授業でファンタジーを読むとよい

●文学の一教材

ファンタジーは、「入り口と出口がある」などとよくいわれます。でも、国語の授業で扱うときに目ざすべきは、これらを見つければ、指摘できるようにすることだけではないと思っています。ファンタジーも、文学的な文章の一つ。文学の読みの力をつけるための一教材と考え、授業を組み立てるようになっています。

●授業がしやすい

これまでの経験から私が感じているのは、「ファンタジーは、授業がしやすい」ということ。読む力の定着には、子どもたち自身の「読みたい・知りたい」という思いから生まれる課題で学習を進めるのが有効なことは、いうまでもないでしょう。ファン

タジーは、みんなが、「不思議」という土台に立ち、「誰もが不思議だと思うのはなぜか」という共通の課題をもって読んでいくことができるんです。そんなふうには、課題の共有が自然にできてしまうというのは、教師としてはありがたいことです。もちろん、「不思議」について、思ったことを話し合えるというよさもありますね。

●三年生で、まず出会わせたい

授業では、登場人物に同化して不思議の世界の中に入り込むことと、その「不思議」の内容と構造を、外から「読者」として捉えることの、両面を大切にしたいと思っています。不思議の世界に入ったとき、そこから出たりしながら読んでいくということですが、私の経験上、それが最もすんなりできるのが、三年生の子どもたち。登場人物になりきった読み方だけでなく、「読者」として作品を俯瞰し、価値づけるような読み方も理解できるようになってくる頃なんです。この時期に、等身大の人物が出てくるファンタジーに出会わせ、読みの力の定着を図っておくようにしたいですね。次のページより、私の実践を紹介します。(談)

「海をかつとばせ」(三年上)

はじめに

■「海をかつとばせ」

本作品は、現実の生活の中に、不思議な存在が入ってくるタイプのファンタジーといえます。不思議な男の子の正体は、「種明かし」的に物語の結末で明かされますが、物語が終わった後もその存在が続いていくかどうかは、明示されていません。

三年生の子どもたちが、等身大の人物と自分を重ねて、入り込みやすいよさがある作品です。ただ、ワタルの変容がはっきりとは描かれていないこと、比喩表現が多く使われていることから、どう読めばいいのかとつまずく子が出てくることも予想されます。そこで、別のファンタジー作品を導入として読む時間を設定することにしました。

■導入教材「ピーターねこ」

導入教材に位置づけることにしたのは、「ピーターねこ」(岡田淳/偕成社)「ふしぎの時間割」収録)。小学生の女の子、みどりの前に不思議な猫が現れる、猫の存在

が消えないまま結末を迎えるなどの点で、

「海をかつとばせ」と共通した構造をもつ物語です。さらに、比喩表現が少なく、繰り返しや平易な表現が多いため、導入として読む際、「不思議」の内容と構造に着目しやすくなるだろうと考えました。

通読した段階で、子どもたちは、物語の中で、みどりが大きく変わったことに気づいていたため、その後は「みどりは、何によって変わったのか」を考えながら読み進めていきました。低学年の頃から繰り返し行ってきた、場面ごとにみどりの行動や気持ちなどを「くしたみどり」で整理していくという方法を取りました。

指導計画(全七時間)

- ①「ピーターねこ」(二時間)
 - ・全文の通読後、場面ごとに整理しながら読み進める。
 - ・人物の変容を読み取る。
- ②「海をかつとばせ」(五時間)
 - ・全文の通読後、場面ごとに整理しながら

指導のポイント

○全文の通読

まずは私が全文を範読し、子どもたちに聞かせます。導入教材からのつながりがあったため、「白いぼうしに青い服の、ちっちゃな子」が現れたあたりで、子どもたちからは「あ、また『不思議』が出てきた」「なぜ急に出てきたんだろう」という声が上がりました。その「不思議」を楽しむ雰囲気を保つよう、「分からないところがいっぱいある、不思議な話だね」などと、意識して声をかけるようにしました。

読み方のつぼ ① 雰囲気作り

分からないものがあることに抵抗を感じず感じます。「分からない！」で思考が停止してしまつと、せつかくの

不思議な物語もつまらないものになっ
てしまいます。まずは「不思議」を存
分に楽しませるために、よく分からな
い、不思議なものを楽しむ雰囲気作り
は重要です。「分からない」という否定
的な言葉ではなく、「不思議」という言
葉で、子どもたちが物語を捉えられる
よう、声のかけ方や言葉の使い方を意
識したいものです。

○中心人物「ワタル」で整理

導入教材と同じように、場面ごとに、中
心人物ワタルの行動や様子などを整理して
いきます。子どもたちは、範読を聞いてい
るときから、「ワタルが『不思議』によって、
何か変わるんだろうな」と思っていた様子
場面ごとに整理しながら、「ワタルは何に
よって、どう変わったのか」「どんな『不
思議』が出てくるのか」などについて考え
ていくことにしました。

本教材は、物語の筋を追うだけなら、三
年生の子どもたちにとって難しいものでは
ありません。ただ、文中には比喩表現が多
く見られます。不思議な出来事について読
み取るには、その比喩表現でたとえられて
いるものを正しく理解する必要があります。

ぶん、この正体はこうなのでは」など、
さまざまに「たぶん」を想像できるのは、
ファンタジーのよいところでは。
作品にもよりますが、読者がそのよ
うに想像できるのは、そうさせる仕掛
けが、作品の中に散りばめられてい
るからです。つまり、それらの仕掛け
を根拠に、その作品の「不思議」の役
割について考えることができるのです。
それによってまた、人物の変容、「不
思議」の内容や構造が、より際立って見
えてくるようになります。

おわりに

内容や構造が共通する導入教材を位置づ
けたこともあり、子どもたちは抵抗なく不
思議の世界に入り込み、それを楽しむこと
ができたのではないのでしょうか。さらに、
ファンタジーの特性を生かすことで、身
につけたい文学の読みの力を、効果的に
指導することができたように思います。

学習後、家庭学習の時間を使って、「不
思議な物語」（ファンタジー）を読み、読
書記録をつけさせるようにしました。そし

この点は、丁寧な指導が求められます。そ
こで、挿絵の拡大コピーを示すことにしま
した。挿絵によって場面の様子が想像しや
すくなり、子どもたちの比喩表現に対する
ハードルが低くなったように思います。特
に、教科書P72・73の挿絵で、ワタルから
見えている景色をしっかりと確認することで、
「観客の顔がばら色」「アドバルーンもまっ
かっか」が示す様子が捉えやすくなりました。
た。

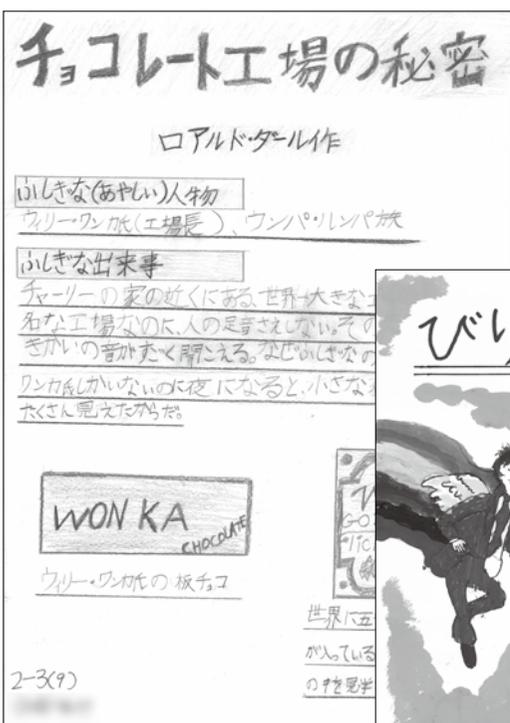
読み方のつぼ 2 挿絵の活用

描かれているものを文章のみから想
像するのは難しい場合もあります。そ
のときの手がかりとなるのが挿絵です。
特に、非現実的なことが描かれるファ
ンタジーでは、挿絵を有効に使い、文
章と合わせて想像を膨らませることが
できるよい手段です。

ただ、挿絵の印象が強すぎると、そ
の情報のみから想像してしまうことも
考えられます。どの挿絵に立ち止まら
せるのか、よく考えて活用することが
大切だといえます。

て、気に入った作品を友達に紹介するポス
ター（左図）を作り、掲示して交流させま
した。導入教材からのつながりの岡田淳作
品、海外の作品など、友達のポスターを見

▼「びりっかすの神さま」（岡田淳）
を紹介したポスター。ポスターには、
タイトルと作者名、「何が不思議なの
か」を必ず入れることとし、その他は
子どもたちの自由に任せた。



▲「チョコレート工場の秘密」（ロア
ルド・ダール）を紹介。作品中の「不
思議」に着目し、読み取っている。

○人物の変容を読む

「はじめに」でも触れたように、本教材
には、ワタルの変容がはっきりとは描かれ
ていません。しかし、ワタルに働きかける
人物、「波の子ども」の役割について考え
ることで、それが読み取りやすくなります。
「不思議」の内容と構造にも理解が及ぶは
ずです。そこで、「なぜ、『波の子ども』な
のか」という問いを立てました。

子どもたちからは、「ワタルが、海に來
ればいつでも応援してもらえる気持ちにな
れるから」「波の子どもならいつでも海に
いるし、また練習に來れば、出てこなかっ
たとしても見えてくれる感じがするから」
など、多くの考えが出されました。な
かには、「海に來ると、波の子どもが出て
くるのではという気持ちに支えられ、ワタ
ルは変わるのではないか」と読者に思わせ
るためという、客観的な読者の見方に立っ
た意見もありました。このように考えたこ
とで、結果、「練習をし続ける強い気持ち
になれた」などと、子どもたちはワタルの
変容を捉えることができたようです。

読み方のつぼ 3 「不思議」の役割

不思議な世界や出来事について、「た

て、感想を交わしたり、自分の読書に生か
そうとしたりする姿が見られました。子ど
もたちは、多くのファンタジーに触れ、そ
の世界に親しんだようでした。

おひさま

本作品は、巧みな伏線、色や香りの表現が効果的に用いられています。人物の変容を追うのではなく、伏線に着目して読み深めたい作品です。これまで積み重ねてきた文学の読みの学習の中でも、「海をかつとばせ」(三年上)では、その初歩を経験しています。結末の「種明かし」を受け、それ以前の「波の子ども」の行動や様子に立ち戻り、つながりを確かめる読みです。ここでは、それを生かし、より深く伏線を読む学習を位置づけたいと考えました。

読み方のつぼ ④ つながりから伏線へ

ファンタジーには、伏線が巧みに用いられ、伏線に着目して読む学習を設定

れらは、女の子の出現のタイミング、女の子の会話など、女の子の行動に関することが主でした。そのなかで、「夏みかんと夏みかんの間に、『不思議』がはさまっている」という気づきの声が上がりました。松井さんが夏みかに白いぼうしをかぶせる場面(教科書P12)と、結末の一文「……夏みかんのにおいがのこっています。」(P16)との間に、不思議な出来事が起きているということです。子どもたちの目は、夏みかんの役割にも向き始めました。

読み方のつぼ ⑥ 始まりと終わり

「不思議」の中で起る出来事や変容を捉えるため、その始まりと終わりを見つけるのは意味あることといえます。さらに、それがどんな始まり方・終わり方なのかを確かめることは、仕掛けを読む(よ)に結び付いていきます。

○人物像を捉える

松井さんの人物像を正しく捉えることも、伏線の読み取り、つまりこの作品の「不思議」に大きく関わります。その人柄が、優しく誠実に描かれているからこそ、読者は

定しやすいものが多い(よ)に思いますが、「種明かし」からつながりを確認する、伏線を追つ、という(よ)に、徐々に、物語の仕掛けとしての伏線を読む目を養っていきたいものです。

指導計画(全五時間)

- ①課題を設定する(一時間)
 - ・全文を読み、人物の設定を確認する。
 - ・読みの課題をもつ。
- ②課題に沿って場面ごとに読む(三時間)
 - ・仕掛けと思える言葉や表現について発表・交流しながら読む。
- ③学習を振り返り、まとめる(一時間)

指導のポイント

○課題の設定
通読後、「女の子が白いちようなんじゃないかと思った人？」と問うと、全員が手

「そんな松井さんの前だから女の子が現れた」とも読めるからです。そこで、それを印象づけるものの一つ、夏みかんに関わる描写に着目させました。

ここで重要になるのが、「これは、レモンのにおいですか。」から始まる冒頭の場面。物語の筋に関係する場面ではないため、私は「この場面は、いらぬのではないかと問いかけました。すると、子どもたちからは「お母さんに対する思いから、松井さんが優しい人だと分かる部分で必要だ」松井さん像を読者に伝える大事な場面」という意見が出ました。そこで、さらに「まるで、……見事な色でした。」(P12)という詳しい描写にも目を向けさせ、松井さんの温かな人柄を捉えさせるようにしました。

を挙げました。全員が思うことは、課題として焦点化しやすいもの。「女の子が白いちようだとは書かれていない。でも、みんながそう思うのはなぜか。きつと証拠があるはず。その証拠を探そう」と、仕掛け探しの課題を設定しました。

読み方のつぼ ⑥ みんなが思うのにはわけがある

文章に明示がないことを、「本当はどうなのか」と議論しても、答えは出ません。それよりも、「明示されていないのに多くの人がそう感じるのにはなぜか」という思考で、その要因となる仕掛け・伏線に着目するほうが、ずっと有意義です。誰もが同様に感じるからには、それを誘う表現や構造の工夫が必ずあるはずなのです。これはまた、意欲的に読む(よ)でも有効です。

○課題に沿って読む

子どもたちからは、女の子とちようを関連づける証拠がいくつも挙がりました。そ

○全体を見通す

作品の「不思議」をより不思議に、味わい深く感じさせているのが、結末の一文です。物語の構成、ファンタジーの仕掛けを捉えるうえで、重要な役割をもちます。最後に、この一文が必要かどうかを検討しました。意見の交流を通し、子どもたちは、この一文には「ありえないような不思議な出来事が起きた後に、現実が存在していた夏みかんの香りが残っていること、『やっぱり本当にあったことなのか』と思わせ」意味があるのだと結論づけました。

おわりに

伏線、人物像、色や香りの表現、鍵となるものなど、着目したい多くの要素をもつ教材が、「白いぼうし」だと思います。押さえるべきことを絞って取り組みました。作品全体を俯瞰し、構成や表現の意味について考えることを通し、子どもたちの中に、「作者の意図」への意識が芽生えてきたように感じられました。

